

特集 「人間とは何か」

〈序〉

人間とは何か、という課題はもともと古くしてもっとも新しくも新しいものである。すでに古代世界においては、ギリシアでも、インドでも、中国でも、それぞれ独自の文化形態を形成しながら、人間とは何かという課題を追究しつづけてきた。その追究は徹底的であり、專注的であつたために、それぞれの形において人間の究極態を表明したということができる。原始仏教でも原始キリスト教でも、人間の奥にひそむ見えざるゆがみをあばき立て、ついに人間の地盤を越えてしまったといえよう。しかるに西洋では、中世の長いキリスト教的時代を経て、ルネッサンスに至り、新しい人間像が登場してきた。人間それ自体に立ち帰ってみれば、人間は世界の中心であり支配者であり、ありとあらゆる存在の王者であるという自覚めである。この自覚は、自然科学やその技術の発達とともに、人間はあらゆるものを無限に克服して理想に近づいていくことができるという確信と実行を伴うて、近世から現代へ突入してきた。この潮流は、たんに西洋の踏んできた経路として、だけではなく、その外のいわゆる未開発の地域においても、ルネッサンスのごとき人間の自覚と、西洋の科学技術の態勢にならうことが、当

然の指針と考えられるようになってきたのである。

今日、比較思想学会のこのシンポジウムにおいて、「人間とは何か」という主題が掲げられたことには、これまでのさまざまな視点からの人間論の問いかけとは性質を異にした意味がこめられている。それは一語にしていえば、第二次大戦以後、その大戦を契機として、世界における各地域での社会体制の根本変革が促進してきており、これまでの西欧文明の基本的理念がそうした変革のなかで問い直されていると同時に、また他方では、人類がこれまで遭遇したことの無い、人口、食糧、資源、公害、原水爆のごとき、人類の存続そのものが問われている諸問題を荷負しているなかで、人類の歴史に立ち戻り、人間の原点に帰って、「人間とは何か」という課題を改めて設定しなければならないということである。もとより、一回二回のシンポジウムで納得すべき解答を期待することはできないのであるが、こうした事態における人間論の問いかけが、もはや人類必然の課題になっていることは明白である。このシンポジウムをささやかな契機として、こうした問いかけの方向が深められ、あるいはまた改められていくことができれば幸いである。

(玉城 康四郎)